
誘拐。そして・・・

ポジティブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誘拐。そして・・・

【Nコード】

N7772A

【作者名】

ポジティブ

【あらすじ】

学校の帰り道、コナンと灰原は家に向かって歩いていった。そのとき、何者かによって気絶させられてしまった。そして、二人が目が覚めた時・・・

1. 学校の帰り道

ある日、5人は学校から家に帰る所だった。

「じゃな、コナン、灰原。」

「ばいばい。コナン君、哀ちゃん。」

「さようなら。コナン君、灰原さん。」

「おう、じゃな。3人とも気をつけて帰れよ。」

「はい。」

そう言って3人は騒ぎながら自分たちの家の方へ帰っていった。(つといても、3人はまだ同じ道なのだが)

そして歩美、元太、光彦と別れ、そこにはコナンと灰原がいた。しばらく歩くと、その二人の後ろには、怪しい人影があった。だけどコナン達は、話に夢中になっていたせいで、後ろからの人影に気づいていなかった。

「・・・だったんだぜ。」

「へえ。なかなかうまくいつてるじゃない。」

「でもな、もうちょつと・・・うつ。」

「えっ。」

灰原はコナンの異変に気づき、コナンを見た。そこには何かを嗅がされて気を失っていくコナンの姿があった。灰原は慌てて後ろを見ようとしたが、クロロホルムを嗅がされ、灰原も気を失ってしまった。

こんにちは、ポジティブです。

初投稿なんで、至らない点が沢山あると思います。その辺は勘弁し

てください。

今回、すつごく短くてごめんなさい。でも、もうほとんど内容の方は作ってあるんで、これからはどんどん長くなると思います。

一つ教えてもらいたい所があるんですけど、皆と別れるときの挨拶をするとき、

哀ちゃんってなんて言いますか？それが分からなくて今回、挨拶の所で哀ちゃんの発言が出来ませんでした。ごめんなさい。

何か他にこうした方がいいなど、アドバイスがある人は教えてください。今後の役に立ちます。

まだまだ未熟ですが、よろしく願います。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

2. 監禁。そして脱出。

「う、う・・・ん。はっ。(こ、ここは。とりあえず、灰原を起こさなきゃ。) 灰原、灰原。」

「う、う・・・ん。こ、ここは。」

「分からねえ。でも、誰かによって俺たち、ここに監禁されてるみてえだ。」

そう。あのあとコナンと灰原は、犯人によってある1室に監禁されているのだ。コナンと灰原は、背中合わせにされ、ロープでぐるぐる巻きにされていた。しかも足まで。

「こんなにくるぐる巻きに縛られているんじゃ、身動き一つできないわね。(んっ。何かしら。右手首にある、ロープとはまた違うものは。)」

同じ頃、コナンも左手首に何か違和感を感じていた。

「それよりこれからどうするの。」

「そうだな。ドアの所まで行って、犯人の様子を見たいんだけど、足も縛られているんじゃあそこまでどうやって・・・。」

そう、一人で縛られているんだっただけでも、2人で縛られているのではどうにもすることが出来ない。

コナンはこれからどうしようかと考えていた。そんなとき、ドアの向こうから音が近づいてきた。

「やべっ。寝たふりしてろ。」

そういつて2人は寝たふりをした。そこへ、犯人のうちの一人がドアを開け、コナン達の様子を伺いにきた。

犯人A「あいつら、まだ寝てるぜ。」

犯人B「みたいだな。まあ、いい。あいつらが起きてから親の電話番号を聞こう。そして、あいつらの親に身代金を持ってこさせよう。」

そう言いながら犯人達は部屋を後にした。

「俺たちが起きるのを待って、起きたら親の電話番号を聞き出し、身代金を持ってこさせるつもりだ。」

「そうみたいだね。これから、どうする。」

「んー・・・。」

そうこうしている間に時間は過ぎていった。

一方、こちらは探偵事務所。

7時になってもコナンが帰ってこないの、蘭は心配していた。

「大丈夫だってー。腹減ったらすかして帰ってくるだろうよ。」

「そうかなあ。でも、いつもは遅くなる時、必ず連絡してくれるのに、今日は連絡一つもしてこないじゃない。やっぱり何かあったんだわ。」

蘭はいてもたっても居られなくなり、阿笠博士の家に電話をした。

「ええっ!? 哀ちゃんも帰ってないんですか。」

「ええっ、し・・・コナン君も!? あの二人に何かあったとしか考えられんなあ。」

「警察に連絡してみます。」

「そうじゃな。それがいいかもしれんなあ。わしもそっちに行っても構わんかね。」

「ええ。大丈夫ですよ。」

「じゃ、後でな。」

そう言って、博士は受話器を置いた。

「あっ、そういえば今日、哀君に・・・。」

博士はそう言って何かを探し始めた。

しばらくして、博士は何かを持ってリビングに戻ってきた。

そう。それは、コナンの予備の追跡眼鏡であった。今日の朝、充電をした探偵団バッジをみんなに渡すように博士は灰原にそれを預けていたのだ。さっそく博士は追跡眼鏡の電源を付けてみた。

「ピコッ」

案の定、コナン、灰原の居場所は、コナンが電源を入れていた探偵

団バッジのおかげでコナン、灰原の居場所を断定することが出来た。

「おおー。こりゃ奇遇じゃ。誰かがバッジのスイッチを入れていたおかげで新一、哀君の居場所が分かったわい。さっそく蘭君の家に行って、このことを知らせねば。」

そう言って博士は蘭の家へ向かった。

その頃、目暮警部、佐藤刑事、高木刑事が探偵事務所に着していた。

「おお。蘭君。コナン君、哀君がいなくなったって本当かね。」

「はい。いつも、遅くなるなら必ず連絡するのに、今日は何もないんです。だから何かの事件に巻き込まれたのかと・・・。」

「そうねえ。いつも真面目に連絡をするコナン君が連絡しないって所を考えると、やはり何かの事件に巻き込まれたと考えるもいいのでは。目暮警部。」

「うーん。そうだなあ。でも今の所、何も手がかりがないのでは・・・。」

外から階段を上がる音が聞こえ、そして探偵事務所のドアが開いた。

「蘭君。哀君達の居場所が分かったぞ。」

「ええっ。本当!？」

「本当じゃ。じゃから車でそこへ行こう。」

「分かったわ。」

「何かあるかも知れんからわしらも一緒について行こう。」

「はい。」

こうして蘭・小五郎・目暮・佐藤・高木は、博士の誘導でコナン・灰原の居場所についた。

「本当にここなんだな。」

「そうじゃ。」

「佐藤、高木はこの中に入り、中の様子を探ってくれ。」

「はい。」

こうして佐藤・高木が入り口にはいった時、犯人はコナン・灰原の所にいた。

犯人A「んん。何か外が騒がしいぞ。」

そういつて犯人はそこにある窓から外を見た。

犯人A「な、何だこれは。さてはお前ら、誰かに連絡したな。」

「してないよ。多分、ボク達の帰りが遅いから探しにここに来たんだよ。」

犯人A「なにっ。今は都合が悪いっていうのに。まあいい。こっちには人質が2人もいるからなあ。」

犯人は窓際へ行き、窓を開け、コナン・灰原に銃口を向けてこう言った。

犯人A「ここから今すぐ離れろ。さもなければこいつら2人の脳みそをぶち抜くぞ。」

ちょうどその時、佐藤・高木がコナン・灰原を見つけ、佐藤は忍び足で犯人に近づいていった。犯人はそのことに全く気づいていない。灰原は窓と後ろ向きになっていたためその様子を伺っていた。佐藤が犯人に近づいた時、佐藤は犯人に蹴りをいれ、犯人を気絶させた。そして、犯人を逮捕した。

犯人が気絶したのを見計らって、高木はコナン達に近寄った。

「2人とも大丈夫？」

そういいながら、高木はコナン、灰原を縛っていたロープを解いた。

「うん。」

「ええ。」

高木は足、体、手のロープを解き終えた後、妙な物がコナンの左、灰原の右腕にあるのに気が付いた。

「何だろう、これ。くっ付いてて取れないみたいだね。」

「えっ。」

そう。それは、銅のような太い物で、それでコナン、灰原の手首をつないでいた。

はずそうと試みるが、どこからはずせばいいかわからない。とりあえずみんな外に出て、外にいる皆と合流した。

「あつ、コナン君、哀ちゃん、大丈夫？ あれっ。どうしたの？ その手首についてるもの。しかもコナン君、哀ちゃんとつながれてる。」

「う、うん。これ、犯人によって付けられちゃったんだ。それよりあの人だれ？ 手錠掛けられて、目暮警部の隣にいる人。」

「あつ、あの人ね、コナン君達を誘拐したもう一人の犯人よ。さっきまでどっかに買い物に行ってたみたい。ちょうどあの人帰ってきた時、後ろ向いて逃げようとしてたから私が空手でやったのよ。ちようど、佐藤刑事がコナン君達に拳銃を向けてた人を気絶させたときだったかなあ。」

「そ、そうなんだ。（あの人、気の毒だな。まー、犯罪犯したんだから仕方ねえけどな。）

「あつ、それよりそのコナン君と哀ちゃんがつながれてるもの、はずさなきゃね。」

「そうだね。」

「あつ、目暮警部。」

目暮警部は佐藤・高木の話聞き、コナンと灰原の手首についた物はずそうと、道具を持ってきた。

「コナン君、哀君、ちよっとその手首のやつを見せてもらっていいかね。」

そう言われ、コナン・灰原は二人の手首についた物を目暮警部に見せた。

目暮警部はコナン・灰原の手首に付けられた物をじっと見つめていた。そんな時、コナンは目暮警部の様子を伺いながら尋ねた。

「ねえ、警部さん。これ、外れるかなあ？」

「んー。これは一段と丈夫そうだなあ。とりあえず署の方に戻って、道具を使わなきゃ取れそうもないなあ。2人共、すまないが署の方

に寄ってもらえんか？」

「はい。」

「ええ。」

「じゃー後でね、コナン君。」

コナン「うん。」

ということで、コナン・灰原は本庁の方へ行くことになった。

2. 監禁。そして脱出。（後書き）

2話を早く読もうと楽しみにしていた方、投稿遅れてごめんなさい。
ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

3. 警視庁にて。

警視庁

「んゝ。これでもダメかあ。すまない、君たち。今ここにある道具ではそれを外せそうにもないよ。」

「ええー。そんなあゝ。」

「本当にすまない。これからそれを外す物を見つけて、必ずそれを外すよ。」

「わ、分かった。ねえ、それってどれぐらいかかるの？」

「んー。それが何で出来ているかを後で見、それからそれを壊せるような物を見つckerただけだから、おそらく2週間もかからんと思うよ。」

「2、2週間も！？そんなにかかるの？」

「なゝに。遅くて2週間ってことだから、すぐに取れるよ。なんせ、今の科学は進歩しているからなあ。」

「わ、分かった。」

「私たちもなるべく早く見つけるようにするから、あんまり気を落とさないでね。」

つと佐藤が付け加えた。

「うん。」

つというものの、コナンの表情は曇っていた。

その横にいる灰原は平然な顔をしていた。しかし心の中では、

（ええっ！？2週間もこれが取れないの？だったらその間、トイレとかお風呂はどうなるのよ。冗談じゃないわ。）っと思っていた。一方、コナンの方も

（冗談じゃないぜ。ガキならともかく、俺たち中身は高校生だぞ。

勘弁してくれよ）っと思っていた。

そして警視庁の外。

「はあ。2週間もこれを外すのにかかるのかあ。先が思いやられるよお。」

「あら。私と居るのがいやだって言うの？」

「いや。そういう訳じゃねえけどさー、これがあると何かとやりずらいだろ。それに、お風呂とかはどうするのさ。」

「そうねえ。こうなってしまった以上、誰かがお風呂とか入ってる時、相手の人はその外で待ってるしかないわね。」

「やっぱそうだよなあ。先が思いやられるぜ。」

「まあ。仕方ないじゃない。」

「だな。それにしても灰原、こんな状況でよく平然としていられるな。」

「あら、ここで何をしてもこれはどうしようもない事実よ。何をしても変わりはしないわ。」

「確かにそうだな。だからお前は平然とした顔でいられるのか。」

「まあ。そうかもしれないわね。（本当は私もあなたみたいに焦っているわよ。だけど仕方ないじゃない。どんな顔したってこれは変えられない事実よ）」

「お前、本当に可愛くねえな。（それにしても灰原はこんな状況でも平然とした顔でいられるなんてすごいな。きつと心の中では焦ってるんだろうけどな。この平然さだけはすごいぜ。）」

お互いそんなことを思いながら博士の家に向かっていた。

3. 警視庁にて。 (後書き)

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

4. 探偵事務所へ・・・

阿笠邸

ガチャッ。

ドアが開いた。博士はコナン・灰原が帰ってきたと思い、玄関の方に足を進めた。

「おお、新一。どうじゃった。その様子だと外せなかったようじゃな。」

「ああ。」

「そうか。それよりどうするんじゃ、これから。」

「あら、私ならあなたの方に行っても構わないわよ。どうせ工藤君とつながっているんじゃ、料理や研究なんてできないしね。」

「ええっ。お前、本当にそれでいいのか。」

「ええ。あなたの子供のふりをじっくり観察させていただくわ。」

「は・は・は」

コナンは灰原のことを聞くため、探偵事務所に電話をした。

「はい。こちら、毛利探偵事務所です。」

「あっ、蘭姉ちゃん。」

「あっ、コナン君。あれ、外せた？」

「ううん。外せなかった。それで、住む所なんだけど・・・。」

「あっ、哀ちゃんならここで住んでもいいわよ。あっ、もちろん博士に許可をもらう必要があるけどね。」

「あっ、ありがとう。ちょうどボクもそれを聞こうとしてたんだ。博士はもう許可をくれたよ。」

「そっかあ、よかった。じゃーなるべく早く帰ってらっしゃいね。」

「うん。バイバイ、蘭姉ちゃん。」

「ばいばい。」

「お前も事務所に居てもオーケーだってよ。」

「そうか、そりゃよかったわい。」

「じゃー私、準備してくるね。」

「おう。」

「工藤君も来るのよ。」

「あつ、そっか、忘れてた。ったく、不便だよなあ。」

「そうね、でも、これが取れるまでは仕方ないわね。」

そう言うような会話をしながら灰原の部屋に行った。」

そして灰原は準備を終えた。

「じゃーな、博士。」

「行ってくるわね。」

博士は悲しい顔をしながら答えた。

「うん。」

「そんなに悲しい顔をするなよ。すぐそこなんだから、しょっちゅう遊びにきてやるよ。」

「でも、今まで哀君と2人で暮らしてたのに、これからは1人になるんじやろ。遊びにくるって行っても1人暮らしになるのはかわりないんじや。」

（ははは。）

そしてコナン・灰原は探偵事務所へ向かった。

探偵事務所

「ただいまあ。」

「あつ、二人ともおかえり。今日からしばらくの間、ここが哀ちゃんの家だからね。だから家のようにくつろいでね。」

「ええ。ありがとう。」

いつの間にか時計は10時を刺していた。

「あら、もうこんな時間だわ。コナン君達はそろそろ寝た方がいい

わね。」

「うん。そうだね。おやすみ、蘭姉ちゃん。」

「おやすみなさい。」

「おやすみ、二人とも。」

そしてコナン・灰原はコナンの部屋に入っていった。
そして、ベッドの中。

「明日、学校で何いわれるか怖いわね。」

「そうだな。特にあいつら。」

「そうね。その中でも特に吉田さんはね。」

「歩美が？それをいうなら光彦じゃないのか。」

「あら、あなた。何も分かってないのね。」

「だから何がだよ（怒）」

「何も気づいてないのね。まあいいわ。あなたには一生分からない
ことだと思うけど。」

「はあ？何だよそれ。（怒）」

「もういいわ。さっさと寝るわよ。明日も学校あるんだから。おや
すみなさい。」

「ああ。おやすみ。」

コナンは少しすねたように言った。

（ほんつとに工藤君は何も分かってないんだから。）
そうして2人は寝た。

5. 初日の朝

次の日の朝。

「やべっ。もうこんな時間だ。灰原、少し急ぐぞ。」

「ええ。」

コナンはいつもの時間に起きたのに、いつもより支度が遅かった。それは昨日、犯人によって付けられた、手首に付けられた物のせいであった。

2人はようやく支度を終え、学校に行こうと下へ降りていった。

「おはよう、おじさん。あれっ、蘭姉ちゃんは？」

「蘭ならもうとくに学校へ行ったぞ。お前達も早く行かなくていいのか。もうこんな時間だぞ。」

「やべっ。いつてきまーす。」

「おい。朝飯はいいのか？ 蘭のやつがせっかくお前達のために朝飯を作ってたぞ。」

「あー、でも時間に間に合わないから朝ご飯はいいよ。それより学校に遅れちゃう・・・。」

「そうかあ？ じゃー気をつけて行ってこいよ。」

「はーい。いいってきまーす。」

そう言ってコナン・灰原は学校へ出かけた。

そして帝丹小学校、2年B組の教室。

時刻は定刻の1分前を差していた。

「はあ。なんとか間に合ったみてえだな。」

「ええ。そうね。」

そして歩美・元太・光彦がコナン・灰原に近寄ってきた。

「おはよう、コナン君、哀ちゃん。」

「ああ。おはよう。」

「おはよう。」

「おはようございます。」

「おせーぞ、お前ら。」

「はは、ちょっと準備に時間かかってね。」

そう言っただけでコナン・灰原は席に着いた。コナン・灰原の席がちょうど隣だったので、その辺は気を使わずにすんだ。コナン・灰原が机の上にランドセルを置いてる時、光彦がある所に目がいった。それは、コナン・灰原の手首だった。

「何なんですか、それは。」

「それ？」

「そのコナン君と灰原さんの手首にある物ですよ。」

そう言って光彦はコナン・灰原の手首にある物を指差した。

「ああ。ちよつとあつてな。」

「なんだあ。また抜けがけかよ。」

「そうですよー。」

「昨日、誘拐されたのよ。」

「ええー。コナン君と哀ちゃんか！？」

「ああ。それで気が付いたらこうなつてたつてわけだ。」

「それで、コナン君達は大丈夫だったんですか。」

「ああ。（大丈夫だったからこうしてここにいるんじゃないか）」

「でも、コナン君も誘拐されることあるんだ。」

（うるせえ。俺にだって油断してる時ぐれえあるよ。）

「でも、哀ちゃんいいなあ。」

「ほんと、コナン君がうらやましいですよ。」

「ははは。」

（これのどこがいいんだよ。準備もいつも以上かかったつていうのに。）

（やつぱり吉田さんはこう言ってくると思つたわ。それにしてもまだ工藤君は気づかないのね。ほんつと鈍いわ。）

灰原はコナンの顔を見てそう思つた。そうこう話しているうちに先生が教室に来て、みんな、席に着いた。

これからコナン・灰原にプチ悲劇が始まった。

5. 初日の朝（後書き）

更新、遅くなってごめんなさい。

やっと今日更新しました。

楽しみにしていた人、長いことお待たせしました。

感想等、何かありましたらお願いします。

ここを直した方がいいっていうのも大歓迎です。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

6. 学校

国語の時間。

「さあみんな、この漢字をノートに練習しましょう。」
みんな「はい。」

（はあ、こんなのやってられねえぜ。）

そう思いながら一応ノートに漢字を書こうとコナンが左手でノートを押さえようとしていた時、

「あつ。」

「あつ、わりい。」

灰原は字を書こうとしていた右手を引っ張られていた。

（ほんっと不便だぜ。）

体育の時間。

この日はコナンの得意なサッカーをしていた。

「あー、くそっ」

コナン達のチームが持っていたボールを取られ、コナンがボールを取り返そうとボールの方に走って行こうとした。

「いたっ。」

「あつ、わりい。」

コナンは灰原がいたために相手チームからボールを取り返すのをあきらめた。

（くそっ。灰原さえいなかったらボールを取り返せたのに。）

コナンは悔しそうな顔をした。

「こめんなさい。私と一緒にだからいつも迷惑をかけて。」

灰原はコナンの顔を伺いながら言った。

「大丈夫だよ。これは灰原が悪いんじゃない、犯人が悪いんだよ。それよりいつもひっぱったりしてわりいな。」

「ええ、そうね。いつも引っ張り回されてるわね。」

「ははは。（相変わらず可愛くねえな。）

いつも不都合なことがあるけど、コナンにとって、一つだけいいことがあった。それは、

音楽の時間

皆で合わせてリコーダーを吹こうとしていたときだった。

「先生。ボク、吹けないんで吹かなくてもいいですか？」

「そうねえ。そんな状態じゃ吹けないわね。じゃあ江戸川君、今日は吹かなくてもいいですよ。」

「はい。」

なんと、コナンは灰原とつながっているっていうのを利用して、リコーダーを吹くのを逃れた。

（たまにはいいこともあるもんだな。）

教室へ帰る廊下で。

「あら。やけに笑顔だね。ひょっとしてリコーダーを吹くの、逃れたから？」

「まあな。でも灰原とつながっている以上、どう考えても同時に吹くのは無理だろ。」

「そうね。でも、これが取れた後に江戸川君一人で吹かされたりして。」

「げっ。」

「なあんてね。」

（まったく。脅かすなよ。）

こんな話をしているときに歩美・元太・光彦が話に入ってきた。

「でも今日はとりあえず吹かなくてもよかったんだから良かったじゃない。」

（とりあえずってどういうことだよ、歩美ちゃん。）

「そうだぞ。それを付けた犯人に感謝しろよな。」

「そうですよ、コナン君。」

「ははは。」

「それより、今日の給食はなんだろうなあ。リコーダー吹いたらお腹すいちゃったぜ。」

「元太君ったら食べ物のことばかり。」

「ははは。」

そして給食の時間

「おおっ。今日はカレーだ。しかもデザートにプリンがある。」

「良かったね、元太君。」

「ああ。」

「ははは。（しかし食べるのも大変だなあ。左手は灰原とつながってるから左手は使うことができねえし。）」

「さあ皆さん、食べましょう。いただきます。」

みんな「いただきます。」

コナンは食べにくそうにぎこちなく食べていた。

「あら、江戸川君。食べるのがいやだって感じの顔してるわね。」

「物食べてる時ぐらいい顔しろよな。なんならお前の分も俺が食べてやろうか？」

「元太君。そんなことしたらコナン君がかわいそうでしょ。」

「ははは。」

「それにしてもコナン君は何をするにも大変ですね。灰原さんとながっているんですからね。」

（そうだぜ、お前ら。灰原は両手使えても、俺は片手しかつかえねえんだぜ）

コナンはそう思いながら給食を食べていた。

7. 学校の帰り道

そうこうしているうちに午後の授業も終わり、帰りの時間がやってきた。

「さようなら。」

「さようなら。」

「コナン君、哀ちゃん帰ろー。」

「おう。」

「ええ。」

帰り道、皆で歩いてる時。

「それにしてもコナン君達が誘拐されるなんて。いつもなら背後から近づいてくる犯人に気づいているコナン君らしくないですね。」

「ははは。しょうがねえだろ。あの時、話に夢中になって油断してたんだからよ。」

「コナン君も話に夢中になって気づかないこともあるんだ。」

「（うるせえ）

「それにしても2人くっ付いてるんだったら、どこで生活してるんだ。」

「あっ、それなら蘭姉ちゃんに許可をとって、灰原も探偵事務所で暮らしてるよ。」

「へえ、そうなんだ。それにしてもいいなー。コナン君と灰原さんはいいつも一緒に。」

「（ははは。）でも、いつも一緒っていうのも不便だよ。」

「それでも一緒にいられるんだからいいなあ。」

（だからよくねえって）

そういつて3人ははしゃぎながら前の方へ歩きだした。

3人が前の方へ行ったと時、灰原がコナンに声をかけた。

「あら、吉田さんはそういう意味で言ったんじゃないわよ。」

「はあ？　どういうことだ、それ。」

「さあね。まあ、あなたには一生吉田さんの言葉の意味が分からないでしょうね。」

（ははは。）

そしてコナン・灰原が皆と別れる所まできた。

「ばいばい、コナン君、哀ちゃん。」

「じゃあな。」

「さようなら、コナン君、灰原さん。」

「おう。」

「おい、コナン。灰原に何かしたらこの俺が承知しねえぞ。」

「ははは。（する訳ねえだろ）」

そういつて二人は皆と別れた。

3人が見えなくなった後、二人は話し始めた。

「はあ。つながっているっていうのも大変だぜ。」

「そうね。いつも一緒にいないといけないからやりたいことも出来ないことがあるからね。特に今日はそうだったんじゃないかしら。まあ。いいことも一つはあったみたいだけど。」

「ああ。そうだな。お前はいいかもしれないねえが、俺は左手が使えねえからなあ。まっ、それのおかげで音楽の時間は逃れることができるんだけどな。」

「そうね。それにしてもこれはいつになったら取れるのかしらね。」

「さあな。でも、2週間もしないうちに取れるだろう。目暮警部は2週間ぐらいって言ってたけど、あれはあくまでも長くてももの話だからな。」

「そうね。私も警察が早くこれを取ってくれるのを願ってるわ。」

「おっ、珍しいな。お前が素直なんて。」

「あら、悪い？　これでもいつも通りのつもりなんだけど。」

（ははは。やっぱりそう言うと思ったぜ。）

2人は話をしながら探偵事務所に帰って行った。

8. 西の名探偵、現れる

ある日、コナン・灰原が学校から帰ってきたときのこと。
探偵事務所

「ただいまあ。」

「あつ、おかえり、コナン君、哀ちゃん。」

「よお。ボウズ。」

笑顔で服部はコナンに挨拶した。

「明日、土曜日でしょ。だからってことで服部君と和葉ちゃんが遊びに来てるわよ。ここに2日間、泊まって行くって。」

蘭も笑顔でコナン、灰原に説明した。

「お邪魔してまーす。」

「いらっしやい、和葉姉ちゃん。ゆっくりしていつてね。」

「ありがとう、コナン君。」

「今、お茶入れてくるわね。」

「おおきに。」

「あつ、あたしも手伝う。」

そういつて蘭と和葉は台所へいった。

二人が見えなくなった時、コナンは話し始めた。

「んで、アポなしで急に来て何しにきたんだよ、この色黒男。」

「なんやとお。」

「クスッ。彼女がいなくなるとコロツと変わるわね。」

「そやろ。やらしいやつちゃんあ。んっ？そのお前らの手首についてるやつはなんや？」

服部はコナンと灰原の手首についてる物を見つけた。

「ああ。これはちよつといろいろあつてな。それで、外れなくなつたんだ。」

「ふうん。まさかあの姉ちゃんよりもこの姉ちゃんの方が一緒に居たくてそうしてるんとかやうやろか？」

「ば、ばーろ。そんなんじゃないよ。ただ・・・」
そう言いかけた所で灰原が話に入って説明し始めた。

「話に夢中になって誘拐されたから。それで目が覚めたらつながれてたってわけよ。」

「お、おい。こいつにそんなこと吹き込んだら・・・。」

「ふーん。誘拐されたんや。工藤もそんなことがあるんじゃないか。お前、観察力が鈍ってるんじゃないか。」

「うるせえ。（やっぱり何か言われると思ったぜ。）それより、今日は何しに此処に来たんだ？」

コナンはすねた顔をしながらそう言った。

「そんなもん、東京を観光しにきたに決まってるやないか。」

「本当にそうなんだろうなあ。」

「ああ。そんなもんで嘘ついてどないすんねん。それにそれ以外の目的で何のために東京くるんや？」

「親の用事とか？」

コナンはふざけてそう言った。

「そんなもんやったらわざわざ和葉を連れて、しかも探偵事務所にこおへんよ。」

「さあな。その用事の帰りかもしれないねえじゃねえか。」

「お前、どこまで突っ込んでくる気や？もうええやないかそんな話。それより明日は和葉達に買い物付き合わされるんだろうなあ。はあ。」

「ああ。」

「どっかでお茶でも飲んでゆっくり話でもしようやないか。」

「あら。じゃあ私があなた達を付き合わせてあげようかしら。」

「げげっ。は、灰原。」

「なんてね。工藤君とつながっているんじゃないからあなた達に付き合っただけよ。」

「なんだあ。驚かすなよ。でもサンキューな。」

「おおきに。」

「でもあなた達のおごりね。」

「ええっ。」

「なあってね。」

「はあ？」

つというような会話をしながら蘭達がお茶とお菓子を持ってくるのをまっていた。

しばらくして、蘭・和葉がお茶とお菓子を持って部屋に入ってきた。

「みんな、ごめんね。遅くなっちゃって。」

皆でお茶とお菓子を食べながら話をし、このひとときを過ごした。

9. 東京観光

予定通り、この日は蘭・和葉、コナン・服部・灰原の二手に別れた。コナン・服部・灰原はの3人は、これからの行き先に困り果てていた。

「これからどういすんねん。」

服部はコナンに行き先を決めるのを押し付けるかのような言い方をした。

「しらねーよ。見せるもんなんて何もねえぞ。」

コナンは少し怒ったような顔をし、そう返事をした。

「そんなこというなや。俺は東京のことあんまり分からへんのや。せやからお前のいう所だったらどこだって連いていったるぞ。」

「んなこと言われてもなあ。（蘭達がいればトロピカルランドとか行くけるけど、このメンバーじゃーなあ。しかも灰原とつながれてるんじゃ、余計に何もできやしない。ただでさえこんな体じゃ乗り物に制限があるっていうのに。）」

コナンはそんなことを考えながらこれからの行き先に困っていた。

「クスッ。」

灰原はそんな二人の会話を聞き、くすくす笑った。

「んあ？なんだあ、灰原。」

コナンはぶっきらぼうに言った。

「何でもないわ。でもどうやら行き先に困っているようね。」

「全くだ。突然来られて見せるもんなんて何もねえぞ。お前はどうかいい所あるか？」

コナンは多分、灰原がどこも行き先などを考えてないと思ったが、ダメだしで聞いてみた。

「そうねえ。どこかのカフェでくつろぐっていうのはどうかしら。それなら皆が居るから話せないっていう話もいろいろできるんじゃない

ないかしら。」

「そうだな。それしかねえよな。それでいいか、服部。」

コナンは灰原に同意したように言った。

「んー、カフェかあ。まー、どこも行くところないんやったらしゃないな。ほんならどつかのカフェ行こか。」

（急に来るお前にそんな言い方されたかねえよ）

っとコナンはそう思いつつ、3人はカフェに行った。

しばらくして、コナン・服部・灰原は裏通りを1本入ったきれいなカフェに入った。

「東京にもこんなええカフェがあるんやなあ。」

コナンは服部を睨みつけていたがあえて何も言わなかった。

3人は席に着き、メニューを見て頼む物を決めていた。そして3人はオーダーする物を決め、オーダーをした。3人がオーダーした物はアイスコーヒーだった。店員は、子供がアイスコーヒーを頼むのを不振に思いながらオーダーされた物を運んできた。

「それで、工藤とその姉ちゃんはどうやって襲われたんや。」

服部はどうやって二人が襲われたかに興味があるらしく、ニヤツとした顔つきでコナンに聞いた。

「ど、どうって……。別にたいしたことじゃねえよ。それより服部こそ和葉さんとはどうなんだよ。」

コナンは話題を変えようと服部と和葉のことを聞いた。

「おい、人が聞いているのに話そらす気かあ？ ほんならあの姉ちゃんにお前のこと言うてもええんやなあ。」

服部は興味のあったことから話をそらされたため、少し不機嫌そうな顔をして蘭のことを出した。

「わ、わあったよ。言えばいいんだろ、言えば。（こいつ、今度仕返ししてやる。）」

っと思いつつ、コナンはその出来事の一部始終を服部に聞かせた。

「ほお。お前もそういうことがあるんやなあ。」

(うるせえ。)

っと思いつながら服部を睨んだ。

服部に事の出来事を話している途中、コナンは何回か灰原手を引っぱり、その都度灰原に謝っていた。

その後もコナン達は今まで起きた事件のことを話し合ったりしていた。その時灰原は、家から持ってきた雑誌を広げて見始めた。

その頃、蘭・和葉はというと・・・。

二人で買い物をして楽しんでいた。

時刻がもうすぐ4時になろうとしたとき。

「あつ、やだ。もうこんな時間。」

「ほんまや。楽しいことをしているとあつという間に時間が過ぎてまうなあ。」

「ほんとだね。急いで帰って夕飯の準備をしなくっちゃ。」

「そうやね。そやけどこの店だけ寄ってかへん？この店、可愛い服がいっぱいありそうやねん。」

「ほんとだね。じゃー、このお店を急いで見て、それから帰ろう。」

「うん。そやね。」

そういつて蘭、和葉はそのお店に入って行った。しかし、二人はなかなかその店から出てこなかった。そして二人がそのお店から出てきて時計を見た時、時計は4時半を差していた。

「いつけなーい。ここに長いこといすぎちゃった。」

蘭がそういつたのを聞いて、和葉も時計を見た。

「あつ、ほんまや。急いで帰って夕飯作らんとあかな。」

「ほんとだね。急いで帰らなくっちゃ。きっとみんなお腹すかせてるだろうし。」

そういつて二人は家の方に向かっていった。

「今日は楽しかったね。」

「ほんまやね。今度、大阪に遊びにおいでよ。その時、いっっぱいいい所案内するで。」

「うん、ありがとう。そのときも沢山買い物しようね。」

「もっちゃんや。あたしがいろいろ案内したるで。」

「ありがとう。」

蘭と和葉はそんな会話をしながら家に帰った。そして、夕飯の準備を始めた。

一方、コナン・服部・灰原は。

カフェで相変わらず事件の話をしていた。その頃、時計は6時を差していた。そろそろ帰らないと灰原は思い、二人に声をかけた。

「あつ、そろそろ戻らないと皆が心配してるかも。」

「ん？」

つとコナンと服部は灰原に気づき、二人とも時計を覗き込んだ。

「げげっ、もうこんな時間だ。早く帰らねえと蘭達が心配してるかもな。」

「そうやな。帰った方がええかもしれへんな。すまんかったなあ、こんな話に付き合わせてしもて。」

服部は軽く灰原に謝った。その後を追って、コナンも灰原に謝った。

「悪かったな。付き合わせて。」

「大丈夫よ。こんなこともあるかと思って家から雑誌を持ってきていたのよ。」

コナンと服部は、灰原が雑誌を読んでいたことに気づいていなかったらしく、少し驚いた顔をしていた。二人の様子を見て、灰原が言った。

「その様子だと私が雑誌を読んでいたのに全く気づいていなかったようね。」

「あ、ああ。話に夢中になりすぎてたみてえだな。」

「さあ、探偵事務所に帰りましょ。きっと皆が心配してるんじゃないかしら。」

「そうやな。ほな帰るか。」

そう言って服部は伝票を取り、会計を済ました。

そして探偵事務所に戻った。

「ただいまあ。」

コナンがそう言った後、蘭・和葉が出てきた。

「お帰りなさい。みんな、遅かったじゃない。」

蘭は心配してたような顔をしてみんなを出迎えた。

「ご、ごめんなさい。」

和葉も蘭に同意したように服部に言った。

「そうやよ、平次。子供を二人も連れてこんな遅くまでどこほつき歩いとったねん。夕飯が冷めてしまうやないか。毛利のおっちゃんもはよ食べるのを待っとるで。」

「しゃ、しゃーないやろ。話したら夢中になってしもて、なかか止まらんかったんやから。」

「まあ、お料理も冷めてしまうし、早く中に入って食べよう。」

蘭は和葉・服部が口喧嘩をする前に口を挟んで喧嘩をするのを止めた。

「そやね。」

そう言って蘭・和葉は奥の方に入って行った。コナン・服部・灰原もその後続いた。

こうして服部・和葉は東京での週末を楽しく過ごし、大阪に帰って行った。

9. 東京観光（後書き）

いつも短くてごめんなさい。でも今回はいつもより長くしました。
投稿もいつも遅くてごめんなさい。

本当はここで事件を起こさせたかったんですけど、トリックなども
全く思いつかず、なしのまま書いてしまいました。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

10. 阿笠邸

ある日の学校の帰り、少年探偵団は家に帰りながら話していた。

「あつ、そういえば最近、博士の家に遊びに行っていないね。」

歩美が突然この話題を持ち出してきた。

「そういえばそうですね。今からでもみんなで遊びに行ってみましょうか。」

「そうだな。じゃーこれからみんなで行こうぜ。」

二人の提案に元太が同意した。

「コナン君と哀ちゃんも大丈夫だよ。」

「あ、ああ、俺は大丈夫だよ。」

「私もよ。」

つということでみんなは博士に家に遊びに行くことにした。

阿笠邸。

ピンポーン。

「誰だろう。」

そう言ってインターネットに夢中になっていた博士は玄関の方へ足を運んだ。玄関の所まで行き、外からにぎやかな声がするのを聞いて博士は少年探偵団の皆が遊びにきたことを悟った。そして玄関の扉を開けた。

「博士ー。遊びにきたよー。」

「入るぜえ。」

「お邪魔します。」

皆は博士に一言挨拶をするとすたすたと中に入って行った。

「おや、哀君と新一。いつものお前達なら呼び鈴なんか関係なくすたすたと入ってくるのに珍しいのお。」

博士は挨拶代わりとして言った。

「ああ。あいつらがいるからなあ。あいつらの前で呼び鈴なしで入

っていくとあいつらも真似するだろ。」

「それもそうじゃのお。」

そういう会話をしながら3人も皆が居る居間のほうへ進んで行った。

二人はソファの方に腰掛け、博士は子供達にジュースを運んできた。もちろん、コナンと灰原にはコーヒーを運んできた。

「ねえコナン君と哀ちゃん、みんな一緒にトランプして遊ばない？」

「私はいいわ。」

「俺もバス。灰原とつながっているんじゃない、手が使えなくてやりにくいしな。」

「そっかあ。二人ともやらないんだ。でも、手がつながっているんじゃない、仕方ないよね。」

そういつて歩美は納得し、元太、光彦と一緒にトランプで遊び始めた。

3人がトランプで遊び始め、夢中になっていることを確認すると博士は話し始めた。

「新一、まだ目暮警部から連絡がないのか？」

「ああ。全くだ。そろそろ連絡が入ってもおかしくないけどな。」

「そうね。そうすれば私はまた博士の家に戻ってきて、いつも通りの生活ができるようになるわ。」

「俺もそうだな。（一緒にいるのも慣れてきたから別にいいけど、いつつも灰原には迷惑かけてしまってるからな。早くこれを外して楽になりたいぜえ。）」

コナン達はそんな会話をしていた。

そのうち5時頃になり、親達が心配するということで夢中になっていたトランプをやめさせ、博士は子供達を家に帰らせた。

「あっ、そろそろ俺たちも帰らねえといけねえな。蘭が心配するしな。」

「そうね。また工藤君の子供の演技でもじっくり観察しようかしら。」

（おめえ、それ一言余分じゃねえか。）

っと思いつつコナンは呆れた顔をしていた。

そして、二人も探偵事務所へと帰って行った。

11. そして、とうとう・・・

ある日、コナン達が学校から帰ってきた時、目暮警部から電話がかかってきた。

「ただいまあ。」

「あつ、コナン君達、ちょうどいい所に帰ってきたわ。」

「えっ？」

「さつきね、目暮警部から電話があつて、それを外す丈夫な物を作ったから、警視庁の方に来てほしいって連絡があつたわよ。」

「ほ、ほんとお。」

「ええ。だから一緒に行きましょう。」

「うん。」

コナンは嬉しそうだった。灰原は無口ではあったが、嬉しそうな顔をしていた。

警視庁

「おお。コナン君達かね。やっとそれを切るための道具が出来たよ。長いこと待たせてすまなかったねえ。」

そういつて目暮警部は早速それを外すのに取りかかった。そしてそれは見事に取れた。

「ありがとう、警部さん。これで灰原も博士の家に帰れるな。」

コナンはうれしそうに目暮警部にお礼をいい、そして、灰原にも言った。

「ええ。そうね。」

そして灰原は目暮警部の方を見て、

「ありがとう。」

こうして、コナン達は探偵事務所に戻り、灰原は博士の家に帰る時、コナンは灰原を見送りに行くよつと蘭に言って、博士の家まで一緒に行った。

博士に家。

「博士―、いるか？」

コナンはいつものように呼び鈴を鳴らさずに家の中に入って行った。灰原もコナンに付いて中に入って行き、入るとすぐ、自分の部屋に行って荷物を片付け始めた。博士はコナンの声を聞きつけ、下に降りてきた。

「おお、新一、きたかね。あれっ、哀君は一緒におらんのかね。」

「ああ、今日学校から帰ってきたら、目暮警部から連絡があったみたいで警視庁にさっき行ってきてたんだ。それでさっき取ってもらったぜ。」

「おお、よかったわい。これで哀君もわしの家に戻ってこられた訳じゃな。」

「ああ、そのついでに博士に報告っと思って今、灰原と一緒に来たんだ。」

「おお、そうじゃったか。ところで哀君はどこに行ったんじゃ？」

博士はあたりを見渡し、灰原を探しながら言った。

「あいつなら自分の部屋に行ったぞ。」

その頃、灰原が自分の部屋から出てきて、皆のいる所にきた。

「おお、哀君やっとわしの家に戻ってこれたのお。」

「そうね、これでやっとやりたいことがいろいろと出来るわ。」

（ははは。まー、俺も灰原と離れられて、いっつも迷惑をかけてた灰原にもう迷惑をかけるようなことはもうなくなったしな。それに俺もやりたいことがいろいろ出来るしな。）

そう思いながらコナンは博士と灰原に「じゃっ、またな。」って言って博士の家を後にした。

そして次の日、学校で。

「コナン君、おはよう。あれっ!? 哀ちゃんが一緒にいない。って

ことは手首についてたあれ、取れたんだね。良かったね、コナン君。」

歩美はコナンと灰原に付いていた物が取れたのがよっぽどうれしかったらしく、笑顔でそう言った。

「ああ、まあな。」

そして元太、光彦も寄ってきた。

「よお。あっ、取れてよかったな。」

「ああ。」

「おはようございます。取れたって事はこれからリコーダー吹けるって事ですね。」

「あ、ああ。（光彦のやつ、嫌なことを思い出させるなよ。）」

コナンは少し引きつった顔をしながらそう思った。

そんな会話を交わしている時、灰原が教室に入ってきた。

「おはよう、哀ちゃん。あれ、取れてよかったね。」

「ええ、そうね。これで誰かさんと一緒に居なくて済むものね。」

そして灰原はコナンを見ながら、

「あれがついてるときは誰かさんに何度も引っ張られたからねえ。」

つと歩美・元太・光彦に聞こえないようにコナンに言った。

「ははは。（悪かったなあ）」

こうしていつも通りの生活に戻った。

もちろん、今まで練習ができなかった分、コナンは放課後、先生に呼び出されて音楽室でリコーダーを吹きました。

THE END

11. そして、とうとう・・・（後書き）

やっと終わらせました。

初めて書いた小説だったので、理解しにくい所など、至らない点が沢山あったと思います。ごめんなさい。

こんな駄文を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7772a/>

誘拐。そして・・・

2010年10月10日13時11分発行